

# 地域の魅力を発信し 持続可能な地域をめざす

## 和歌山県海南市 げんき大崎

毎週土曜日の朝、公民館からの区内放送が「かざまちからお知らせします、本日アジ、アカシタ、エビジャコ：お惣菜は、サゴシの棒寿司、ワカメの酢の物、かざまち揚げ：野菜は、玉ねぎ、ジャガイモ、キャベツ：などが入荷しています」と販売内容を知らせる。放送を待たずに午前8時頃から三々五々地区の人たちが「かざまち」に集まり、店内に入る整理券をもらう。開店の10時を待ったためである。「おはよう！」「いい天気やね！」「今日は足赤エビあるらしいね！」「○○さん今日は見かけんね！」「あんたらご苦労さんやね！」などと会話が飛び交い、静かな大崎地区にコミュニケーションの輪が広がる。

「かざまち」は隣接地が地元の野菜販売、

1階が調理場と惣菜・鮮魚の販売、2階がコミュニティスペースでカフェや食事もできる施設。運営するげんき大崎は、地元の食材を中心に、鮮魚・惣菜・野菜の販売を行い、高齢者など買い物弱者対策、コミュニティの拠点づくり、地域の維持や活性化を目標としてげんき大崎館「かざまち」の運営を行う。また、食の体験イベント、月1回の資源ごみ回収や地区の祭のサポート、地域おこし協力隊や移住者支援などの地域づくりに取り組んでいる。

### 発足の経緯と活動

「げんき大崎」は和歌山県の北部、海南市下津町大崎地区にあり、紀伊水道に面し

た入江（かざまち港）のある地域。かつては底引き漁業、柑橘農業、海運業で栄えた所で、万葉の時代から（地区内に万葉の歌が2首残っている）四国や関東方面との交流が盛んに行われた地域で、地区の入り口には紀伊国屋文左衛門船出の地と称される碑がたっている。現在203戸、人口467人ほどの旧大崎小学校区で、一自治会（12の班）規模で、日に3回コミュニティバスが最寄りのJR加茂郷駅から運行されている。

げんき大崎が発足したのは、子どもの減少による大崎小学校の適正配置が大きな地域の課題となる中、平成19年～平成20年に大崎区（自治会）が実施した県の「水土里（みどり）のむら再生支援事業」のワークショップ



プ（地域の課題、資源や魅力を発見し、緊急度・難易度等に分け取り進む目標づくり）がきっかけで、区長の呼びかけ（区の役員任期2年体制では、地域づくり）に継続して取り組むことが難しいとの考え）で、世話人を中心にワークショップ参加者有志数名で、平成19年3月に発足したのが始まり。

ワークショップにより課題や魅力が掘り起こされたものの、世話人は地域の活性化のために何から、どのように取り組んで良いのか暗中模索の中でスタートだった。初めはワークショップテーマから「サマー



げんき大崎館「かざまち」を支えるメンバーたち

フェスター「昔の写真展」、トライ遠泳（小学生が例年行っていた遠泳を地区外の子どもを対象として実施）、稲荷神社の秋祭り協賛「イベント運営」などに取り組んだ。

活動の財源は、発足した初年度のみ区から3万円の補助をいただいたが、ちょうど海南市がごみ減量のため、資源回収に取り組み団体に対し、収集量に応じた活動補助制度を導入したことともない、げんき大崎もそれに登録。資源ごみの売上金と活動補助金が、その後のげんき大崎の活動の基盤となり、自主財源を得ることで活動の継続につながった。

### 食の体験イベントをはじめ

平成21年には、「復活！夏の盆踊り」、げんき大崎の現在につながるイベント「わかめとレモン狩り」食の体験イベントを開催した。食の体験イベントは、地場産業の養殖わかめの「めかぶ」が、収穫作業が複雑で捨てられていたことから「何とか利用できないか」とわかめ刈りとレモン狩り、ランチをセットにして、地区外の人にPRすることを思いつき実施した。概ね年1回春に開催してきた。養殖わかめのロープを波止場にクレーンで吊り上げ、歓声の上がる



食の体験イベント、レモン狩りの様子

中、根元の「めかぶ」ごと刈り取る体験、とれたての生わかめをレモン味の二杯酢をつけてしゃぶしゃぶでいただくランチは人気で、一時は100人を超える参加があった。加えて平成25年には、夏のイベントとしてブルーベリー摘み取りとエビジャコのランチをセットにして体験イベントを開催し、地区外の人々の参加が増えはじめ、現在も継続して取り組んでいる。

食の体験イベントは、研修会等に参加する中で学んだ「地域活動はボランティア活動に終始するだけでなく、継続するための

財源を確保すること、参加者からお金を出してもらえような事業を実施していくこと」を目標に毎回参加費を取って行ってきた。

また、げんき大崎は区の呼びかけで発足した経緯から、毎年事業内容や会計の報告を地区内に回覧し公表、区民全員が会員との思いで活動を行ってきた。しかし、その都度協力を呼びかけながらもメンバー中心に運営してきたことから、継続して区民から協力が得られず、イベントの準備が不十分な場面も生まれ、課題となっていた。

また、食のイベント開催時には参加者の食事を作る設備の整った調理場が地区内にはなく、その時々で学校や公民館、地区会館を使って準備してきたが、設備面でも衛生面でも不安があり「調理作業ができる場所が欲しい」という意見が女性メンバーの中から出始めた。

## 地域活性化の活動へ

平成25年4月には、げんき大崎への地域の理解を深め、会の充実を図ろうと一つの団体として会員募集、名簿の作成、規約の整備と会費制導入を行い新たな体制づくりを始めた。



「かざまち」で食の元気を届ける

そんな中、5月頃過疎集落に対する支援の補助事業の照会があったが、補助対象地域が中学校区であったため地域間の調整が困難なことから、やむを得ず見送っていた。ところが、9月になって再度県から、同様の趣旨の国の補助事業の照会があり、協議の結果申請を決め、期間が短い中内容を何度も修正しながら申請を行うことができ、無事採択されるとともに翌年平成26年には事業を開始した。

加工所は、漁協の使われていない作業所を借りて改修。漁協組合員や農家に魚や野菜販売の説明会を開くとともに、施設の取り組み内容や名称募集、販売協力者への依頼と納入や価格設定の調整、加工所スタッフや人員体制、施設の備品調達（調理場の流しや調理台などは廃業した近隣料亭から譲り受けた）衛生面などの法的な手続き、

直売所のアドバイザーやスローライフの専門家を招いた研修会開催、アンケートによる惣菜や弁当の価格帯や内容の希望調査、実際の販売に向けた試行、マスコミ各方面へのPR、補助事業の報告書や決算書作成等々様々な作業が必要であった。

平成26年10月には区民へ公募していた名称の中から大崎地区に所縁のある（げんき大崎館「かざまち」）に決定し、稲荷神社の秋祭りイベントで発表を行った。

## げんき大崎館「かざまち」を開設

開店は、平成26年12月を目標に進めてきたが、メンバー全員初めてのことで準備が間に合わず、平成27年1月試行販売を経て、待ちに待った平成27年2月14日無事に、開所式と開店を迎えることができた。開店当初は、和歌山市、岩出市、県外からは大阪府の泉南や奈良方面からも来客があり、対応に追われたが、客層は次第に周辺市町の利用者に移り、現在では地域の方々を中心となっている。

また、初年度は、週1度の開店の土曜日が天候に恵まれ、順調に滑り出すことができたが、鮮魚の販売は天候次第である。現在は、前日に魚の入荷状況をホームページ

とFacebookで発信しているため、他地区の来客は概ね情報を確認した上で来店してくれている。営業面では、赤字を出すことなく比較的安定した売り上げを維持できている。

今年度で5年目に入り「かざまち」は、区民の支えとボランティアスタッフ（60歳〜70歳の女性を中心に）の努力により、土曜日の販売営業と週3日のカフェ営業で、現在年間平均600万円前後を売り上げている。その中からスタッフに生きがいを持って継続して活動をしてもらうための工夫や、施設の維持管理費支払（家賃、水道光熱費、保険料）とともに初年度分から法人税を申告し納めている。

## 「地域おこし協力隊」の導入

げんき大崎の活動で特に「かざまち」の情報発信や運営スタッフが足りないことから、平成26年〜平成27年の当地区で開催される市政懇談会で要望していた「地域おこし協力隊」の導入について、海南市で初めての制度導入を平成28年度に決定。地域おこし協力隊を受け入れるに当たっては、公民館とげんき大崎が区の協力理解を得て関係者に働きかけ「大崎地区地域おこし協力



わかめの刈り取り体験

隊を支援する会」（会員…漁業組合、船舶海運組合、J A支部、中山間、区、公民館、げんき大崎。後に、大崎地区移住者支援協議会に改称）を立ち上げた。

げんき大崎の発足から6〜7年の間は、食の体験イベントで地区外から参加を募る事業が多いこともあって、区民からは「外向きの活動ばかり行う団体だ」「変わったことする人らやなあ」「区民のための活動とちがう」など冷やかな目でみられることも多かったが「かざまち」の開設で、地元魚や野菜を仕入れ販売する直売所がで

き、区民が身近に購入できるようになったことで区民のげんき大崎への理解が随分深まった。

現在げんき大崎は、会員37名、賛助会員2名、理事10名で、会議は総会1回、理事会年3〜4回、「かざまち」は会長・副会長が館長・副館長を兼務し、理事の中から惣菜部門、仕入れ、販売、会計それぞれの班長を兼務し、運営やイベント等の打ち合わせ会議は営業日閉店後に随時行っている。

また、かざまちの女性スタッフは毎月1回全員集まって反省会を開き、衛生面や惣菜の味付け、新メニューの開発などを話し合っている。そんな中、大崎湾で捕れるタコを使って「タコ焼き」を販売しようと提案があり、自分たちで機械の購入費用を出資し販売にこぎつけた。また、この夏からは「かき氷」を始めようと、現在地元の果物を使ったシロップを開発中である。そのように、女性メンバーは「かざまち」に関わることで、活動に生きがいを感じ、積極的に取り組んでくれるようになった。また、地域の高齢者の方々も、乳母車を押して「かざまち」の土曜日の販売やカフェに訪れ、かつての大崎に日常的に見られた近所や親しい人たちとの会話を楽しみにしてくれており、その姿にスタッフはいつも励まされている。この



「かざまち」は地域のコミュニティ

ように「かざまち」の地域のコミュニティづくりへの貢献度は大きい。

今年も、わかめ刈りと生わかめしゃぶしゃぶを楽しむ体験イベントを開催するとともに、夏のブルーベリーを楽しむイベントを開催した。さらに、各月に地区内の若い女性に声をかけ、プロの料理研究家を招いて「お料理レッスン教室」を開催し「かざまち」メニュー開発に関わってもらおうと、若い女性に「かざまち」に関心を持ってもらい一緒に活動するきっかけづくりも行っているところである。

かざまち開設後は、地域づくり団体や、起業希望者、行政担当者、研修のための講師等が訪れるなど、徐々に活動が知られるようになるとともに、各地の情報や先進事例も多く入るようになり活動の輪が広がった。併せて、県の婚活事業の開催地協力や

移住体験ツアーの受け入れ、市の「歩くとウォーク」おもてなしチェックポイントなどげんき大崎は「かざまち」を拠点に行政と協働で行う事業も年々増加している。

げんき大崎は、発足から10年大崎地区に大きな影響を与えるようになった。昨年から本格的に取り組み始めた移住支援では、希望者が13組大崎を訪れ、この春初めての移住者（1所帯2人）を迎えることができた。

今後げんき大崎は、地域へのボランティア活動の部分と、拠点を活性化するため地域外への営業的視点を両立させながら販路の拡大を行い、1、2年後何らかの法人格を取得し、スタッフを雇用、最低賃金以上を支払える雇用の場所づくりを目指す。

当地区を取り巻く環境は、近年急激に変わってきた。商店は閉店し、小学生は2名で隣町にタクシーで登校、底引き漁師は1人になり、耕作放棄地が増えるなど、過疎化の進行は深刻。さらに、南海トラフの地震による津波では約80%の家屋が水没の恐れがあるなどである。さらに公民館の調べでは、高齢化率は43%で、地区の平均寿命から推察すると、10年後には1000人の人口が減少することが予測される。和歌山大学システム工学部が行った、当地区における防災のアンケート調査では、30年後に「空

き家」になると70%の家庭が回答している。消滅地区になるかもしれないことは、急に現実味を帯びてくる。

それでも、この海山の素晴らしい自然、そこから生まれる豊かな食の恵み、そしてなりよりも区全体が一族のようにお互いを支え合いながら、地域を守ってきた区民のつながりは大崎の宝である。

大崎に住んで良かったと今の住民には感じてもらいたいし、大崎で育った子どもたちにもこの宝を受け継いでもらえるように残し、消滅ではなく、持続可能な地区であり続ける努力をこつこつと積み上げることが、げんき大崎のミッションであると思いき、メンバーは活動している。

「かざまちで食堂を開こう」「湾を使ったアクティビティーをできないか」「空農地で体験農園やグランピング場を作れないか」「空き家のゲストハウスがあれば」等々とメンバーが「かざまち」に集いアイデアや夢を語りながら、区民みんなで地域の魅力を再発見、創造し、外に向かって発信することで、活性化実現には遠いかもしれないが、将来に渡り大崎が持続可能な地域であることを願い、自主的な取り組みを、これからも模索していく。

（海南市大崎公民館主事 西川次彦）